⇒ 「灰かぶり」といわれる少女は、富裕階級のお金持ちの娘でした。母は病気で亡くなりますが、神様を信じて、素直な心でいました。

... so daß es sitzen und sie wieder auslesen mußte. Abends, wenn es sich müde gearbeitet hatte, kam es in kein Bett, sondern mußte sich neben den Herd in die Asche legen. Und weil es darum immer staubig und schmutzig aussah, nannten sie es Aschenputtel.

「一日中はたらいてどんなにくたびれていても、晩には、ベッドに入らずに、かまどのそばの灰の中に横にならなければなりません。それで、この少女はいつも灰だらけで、よごれたかっこうをしていたので、みんなは『灰かぶり』と呼びました。」